

学長賞

「パズル」

山田悠介（角川書店）

健康栄養学科 渡邊梨加

2011年、『リアル鬼ごっこ』が若い読者から圧倒的な支持を受け、大ベストセラーとなった。この著者によってデビューを果たした山田悠介。彼がそれ以後に生み出したロングセラーの一つにこの作品がある。

物語は、超有名進学校のエリートの中のエリートだけが集められた特別クラスが、正体不明の武装集団に占拠される事件が起こることから始まる。人質にされたのは生徒を自分が出世するためのコマとしか思っていない性格最悪の担任教師、安田。安田を救うための条件として武装集団から出されたのは、広い校舎のところどころに隠された2000ピースのパズルを見つけ出し、正しく枠にはめてパズルを完成することであった。生徒たちに与えられたタイムリミットは48時間。間に合わなければゲームオーバー。安田は殺されてしまう。このゲーム、参加するか否かは彼らの自由だ。

このような選択がせまられたとき、普通の高校生だったら何を思うのだろうか。まず、誰しもが自分は助かりたいと思うだろう。そして、人質の命のことも考えるだろう。しかし、日々勉強漬けである特別クラスの生徒たちは違っていた。助かりたいと思っても、次に考えるのは人質の命ではなかった。評判に悪影響がでることやエリートとしての輝かしい人生に汚点が残ることへの心配であった。私はそのことにとっても驚き、ショックであった。人の命より自分のブランドが大事なのか、と。彼らは普通ではないのだ。そんな中でただひとり主人公の茂夫は普通であった。茂夫は最初から最後までクラスメイトたちに安田を助けようと必死に訴え続ける。

はたして茂夫の訴えは普通でないクラスメイトたちの心を動かすことができるのだろうか。力を合わせてパズルを完成することができるのだろうか。また、武装集団の目的は何だったのか。これらの点に注目して読んでほしいと思う。

そして、読み終えたら一度考えてほしい。自分がこの立場だったら何を思い、どう行動するだろうか。